

日吉台地下壕保存の会

# 会報

第31号

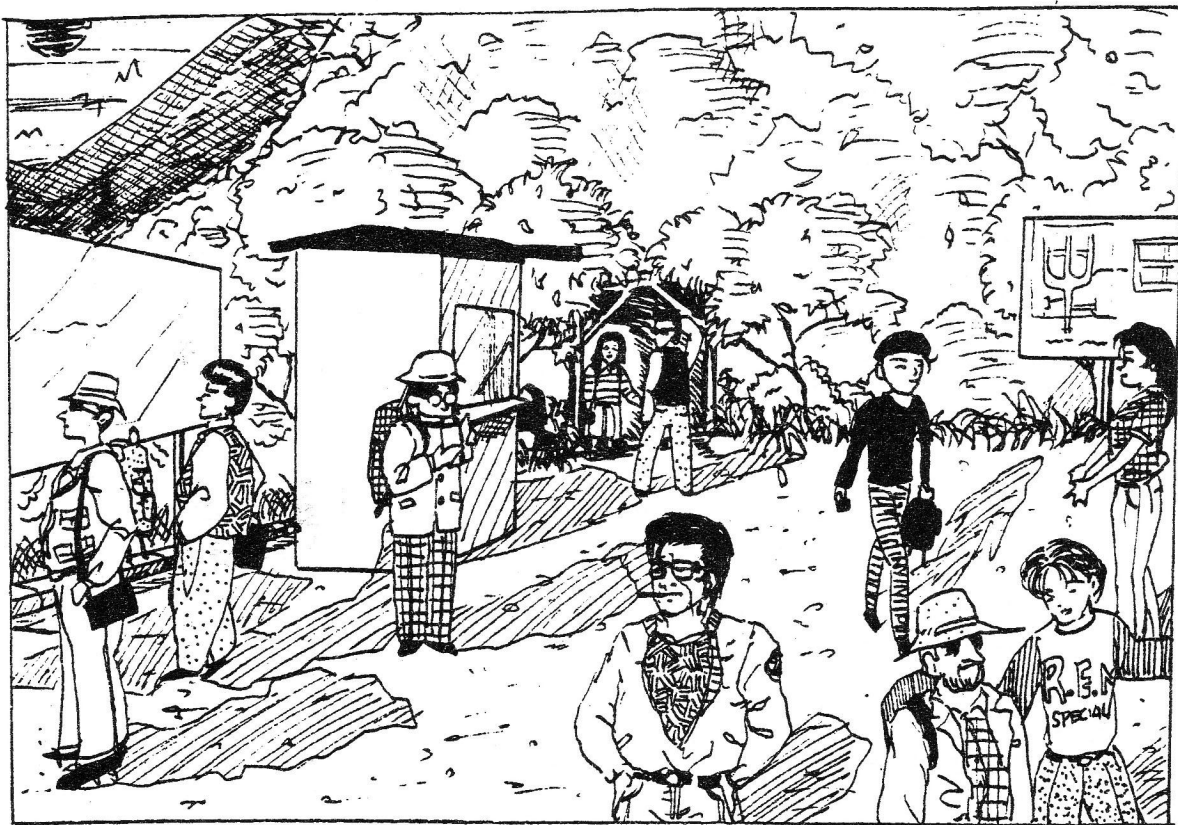
発行 日吉台地下壕保存の会  
編集 事務局

223 横浜市港北区下田町3-15-27

寺田方 TEL.045-562-1282

(年会費)一口千円で、一口以上  
郵便振込(口座番号)横浜 5-74921

(加入者名)日吉台地下壕保存の会

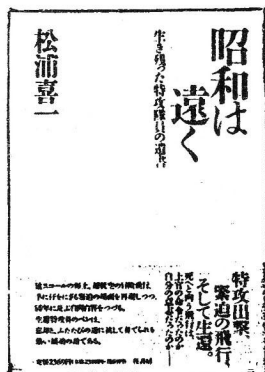


旧松代大本営地下壕入口の風景

昨夏、岡上、足立さんが見学してきました 岡上そう画

目次	ページ	
昭和は遠くを読んで	2	連載日吉台地下壕
旧陸軍の登戸研究所		当時の関係者の
取り壊しを3年間凍結	3	思い出話 7
日吉台地下壕見学会感想文	4~5	幹事会報告 8
		お知らせ 8

松浦 喜一著

昭和は遠く、生き残った特攻隊員の遺書、  
を読んで

幹事 中沢 正子

最終章の「和泉少尉はなぜ生還したのか」では、「特攻とは?」「何故生還したのか」「戦争とは?」等、松浦氏の苦悩が、読み続けてこられた戦争記録を通して、明らかにされていく。その中で、次の二つの引用文が私の心を打った。

一つは、「大和」艦上に、幹部を招集し行なわれた、草鹿聯合艦隊参謀長の沖繩への艦隊特攻作戦の趣旨説明の際、駆逐艦の若手艦長が発言する次の言葉である。

「真に帝国海軍力を、この一戦に結集せんとするならば、なに故に豊田聯合艦隊司令長官自らが、日吉の司令部防空

壕を出て、直接我々を陣頭指揮、特攻出撃の行を共になさらないのですか」

書物の中に日吉の司令部防空壕が出て来るのは、私にとつてはじめてのことで、これまで聞いてきたレイテ沖海戦や、沖繩特攻作戦の命令が、日吉の地下壕から出されたということが真実であつたことに、改めて戦慄を覚えたのである。また、上官に対して、若手はつきりものをいうことにも驚きを覚えた。

もう一つは、「大和」士官室長の臼淵磐大尉が言う次の言葉である。

「進歩のない者は決して勝つことはない。負けて目覚めることが最上の道だ。日本は進歩ということを経んじ過ぎた。私的な潔癖や徳義にこだわって、本当の進歩を忘れていた。敗れて目覚める。それ以外に、

どうして日本が救われるか。今、目覚めずして、いつ救われるか。俺達は、その先導になるのだ。日本の新生にさきがけて散る。まさに本望じゃないか」

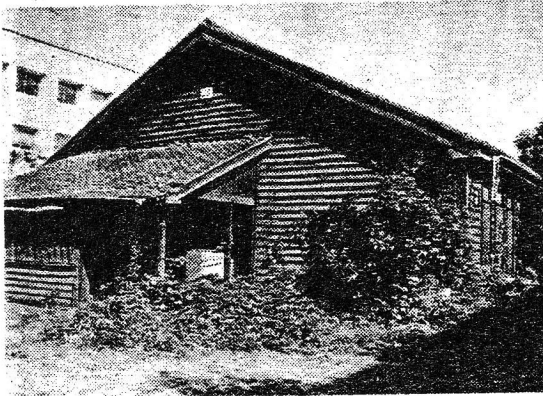
戦時下にこれ程のことを言い切つて戦死していった人がいたことに、深い感銘を受けたのである。

松浦氏の自らの疑問を解き明かそうとする自問自答の文脈の中に、追体験し一緒になつて考えようとする自分を見いだし、引用文の原文に迫ろうと吉田満著「戦艦大和」(角川文庫)「鎮魂戦艦大和」上・下(講談社文庫)を読み終えたことは、私の収穫であつた。これからいろいろな記録を読み進み、先人の意志を無にしないう努力しなければならぬと思つた。

昭和二〇年六月一九日、万世基地を出発した三機の特攻機は高度二〇mという超低空飛行で沖繩をめざした。あと一〇分か二〇分で敵艦船へ突入という時に一機が墜落していく。その直後、何故か、和泉編隊長機は北をめざし、生還へのコースをたどる。「どうしたのだ? 何故だ?」と思ひながら編隊長機を追いつづけ、生還した松浦特攻隊員の五〇年にわたる自問自答の記録である。

旧陸軍の  
登戸研究所

# 取り壊しを3年間凍結



取り壊しが凍結された旧登戸研究所の研究棟

会報第二九号に掲載した明大生田キャンパス内の旧陸軍登戸研究所の建物保存についての続報と、同研究所の元研究員の自分史の記事をお届けします。

## 「調査に協力」と明大

教職員「保存にはずみ」と歓迎

第二次大戦中の日本最大の秘密研究機関で、現在の明治大学生田キャンパス(川崎市多摩区東三田)にあった旧陸軍登戸研究所のうち、大学側が取り壊す予定だった現存研究棟の一つ、農学部二十六号棟が、九七年度末まで取り壊しが凍結されること、一日分かった。先月十四日、教職員組合との交渉の席で、大学側が明らかにした。研究棟の保存を主張する同大人文科学研究所の教職員らが、来年度から三年間、登戸研究所について調査・研究するのに伴う措置。大学側は将来的には、取り壊しの方針を依然、崩していないものの、教職員らは「これを機会に本格的な保存運動にはずみをつけた」と話している。

今回、三年間の保存が決まった二十六号棟は、二棟残る木造研究棟のうちの一つ。当時、動物への細菌実験を行っていたが、研究内容が明らかにされていない。

い。今年初め、大学側は防災面や教室不足を理由に数カ月以内の取り壊しを表明したが、教職員らが反対したことから、一時的に取り壊しが棚上げにされていた。

大学側は、三年間の取り壊し凍結について「研究棟は歴史的建造物なので、できる限り調査に協力したい。しかし、永久保存は、予算面など一大学としては手に余る」と説明する。

一方、同研究所の調査に加わる森恒夫・経営学部教授は「保存運動の効果が早くも出て、うれしい。調査

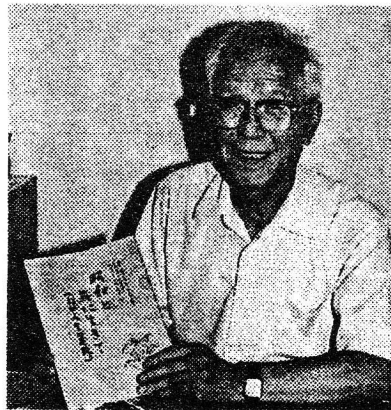
を通じて登戸研究所の歴史的意義をより明らかにするとともに、本格的な保存方法を考えていきたい」と話している。

登戸研究所は、スパイ活動などの謀略戦のために作られた研究機関。風船爆弾や中国の二セ札などを製造し、実際に使ったり、毒ガス、細菌兵器やレーザー光線などの研究も行った。また、中国での人体実験などで有名な731部隊ともかわっていたともいわれる。戦後、研究施設は同大に払い下げられ、多くが校舎として使われてきたが、近年、老朽化からほとんどが取り壊された。

毎日新聞

九四・一一・二

## 昭和に生きた足跡つづる



自分史「昭和と共に生きて」を手にする和田さん

戦争がいかに無益なものかを若者たちに知ってもらおうと、細菌兵器や風船爆弾の研究で知られる旧陸軍の秘密研究機関「登戸研究所」(川崎市多摩区東三田)の所員だった和田一夫さん(七二)川崎市麻生区細山が、自分史「昭和と共に生きて」わが人生の足跡」を自費出版した。研究所でのエピソードやシベリア抑留、中国の戦犯管理所での生活、帰国後日中友好運動に奔走する日々が百五十ページにわたってつづられている。

毎日新聞 九四・八・一一

# 日土ロム口地下壕

目元学子△云感心相心△

一九九四年七月二四日

国立市公民館受講者

★昭和二〇年八月九日フイリピンで戦死致しました父の事とダブリ、この地下壕からの指令が父達の所にどのように伝わったのか、父達はどのような気持ちで死んで行ったのか、つらい思いが致します。

発電、飲料水等工夫されているのには驚きました。

★沢山の方々に助けていただき、やつのことで泥水の中を歩きました。けれど、工事にたずさわった人々の苦勞を思えば・・・

松代、登戸、百穴、日吉とめぐり来て、思い半ばに過ぎるものありという感じですが、八〇才に近い我身の残りの時間に今日の経験をもどのように活かすか、重い使命を感じま

す。

★今までは加害者としての日本というのをかなり強調し、自分も意識して戦争記念日を過ごしていたが、今回は敗戦した日本、被害者としての日本を特に感じた。四年間もアメリカの統治下にあった日吉台地下壕のことや、入口の爆破のことを聞くと、日本の敗戦のみじめさが分かり、同時に開戦の段階で五〇%の勝率と目算していた指導部が、それでも戦宣告したことに日本軍のおろかさを感ずる。

★小学生が退屈していやがるかと思ったが、大変興味もち親子で参加できてよかった。終戦記念日が近づくにあたり、今日の体験をいかし内容のある話を親子ですることができると思う。

地下壕内で鍾乳洞でみられる貴重な岩石や菌類がみられた

のも大変うれしく思った。

★負けると分かっていて、こんな立派な物を造り、その為にどれだけの人々が苦しんだことか。朝鮮の人々も今だに、差別を受けている現状を考えると、戦後は終わっていないと言われているのは本当だと思えます。知らないと言うことは怖い事です。私達戦前生れが語りつぐ義務があると思います。二度と戦争が起らない為に！

★思っていた以上に壁がかたく、しっかりといて驚いた。戦時中の一年間にあればどの穴をいくつも造るにはどれだけの人手を費やしたのか。そのエネルギーが違う方向に向いていれば、松代などの無駄な物が出来ずに済んだのではないだろうか。生で見えてショックを受けました。

★この壕が唯一の海軍の司令部とは思えないほど貧弱なも

の。改めて最高責任者の無能ぶりに憤りを覚える。登戸の方が日本の特殊部隊の実態を残しているような気がする。

★戦時中はあんなに暗くジメジメした所で仕事をしていた人もいたと思うと、やっぱり過酷なものだったのだと思う。初めは面白半分だったが、すぐく勉強になったし、来て良かった。

★地上で生活しているだけで爆弾が落ちてくる世界なんて異常だ。あのような息のつまる場所で生活する必要があるのか。あるとすれば穴にもぐれる人々はいいが穴にもぐれない一般人はどうするのだらう。「誰の為に戦争をするのか？」という疑問が頭から離れなかった。

★今まで知らなかった現実を知らされた。隠されていると言つか表にでない事実がかな

り沢山あるということを知りました。

戦争中に使われた地下壕に入れたなんて信じられないです。私も含めて今の人は、昔のこと（戦争のことなど）をすぐ忘れがちであるから、こういった見学会を開いてくださると非常に嬉しいです。

★詳しい説明があったので理解の補助となり大変良かった。しかし、もう少し内部を時間をかけて見学したかったというのがホッソです。寺田先生がほとんど毎回のようの説明をされているということで、先生がお忙しいのが原因かと思えます。

存在を知らせること、戦争や平和について考えるきっかけづくりとして見学会は有意義なことだと思います。今後は見学会に加えて解説をする人の育成も行なって欲しいと思います。

ます。

★保存会で作った本がありますが、一般書店では購入できないとのこと。会員でお金を出してでも、書店に置くようにして欲しいです。そういう活動が他の人々や行政を動かしていくのだと思います。

保存についてどうお考えになりますか

★観光化せず、にもかかわらず、広く一般の方々に知ってもらおうということは、大変難しいことだと思います。入口が個人宅にあること等他の難点も多いとは思いますが、次世代に伝承する意味で保存は大切な課題になっていくことと存じます。壕内の整備が不可欠でしょうか。

★戦争や平和の問題を考える上で、有形文化財としての貴重

な資料だと思う。後世に伝える為にも保存、見学等積極的にやっていくべきだ。

★日本の戦争の歴史を伝える為にも、保存、公開は必須だと思います。ただ、公の機関での公開になると、公開の仕方にも問題が出てくるかと思っています。保存されるようになるにしても戦争賛美的にされないように、市民が運動していく必要があるでしょう。

★松代にしても、日吉にしても、保存して、歴史遺産は歴史教育に役立てる唯一の物で、百聞は一見にしかずです。保存活用は私達戦前生れの務めではないかと思えます。

★この地下壕を保存するとともに、このことを多くの人々（特に若者、慶応高校、大学の学生など）に知ってもらえるよう、頑張ってください。

★単なる記念物としての存在

でなく、一部を平和祈念になるような企画をしたらと考えます。

★保存会のような地道な市民の活動により、正しい歴史の真実が明らかになることを期待しつつ、国家レベルでも真実の究明に力を入れて欲しいです。保存会が国に何らかの影響を与えられたらいいと思います。

★戦争の無残さ、空しさ、無謀さをのちの世の人たちに伝える為に、ぜひ保存運動をと思います。携わった人々の涙と汗と血を無駄にしないためにも。

★大学の地下という半公共の場にあるのですから、公の力でもって今の状態をこれ以上壊さないように管理できればいいと思います。



連載

口士ロム口地下壕

当時の関係者の

田思い山出証 8

## 地下壕の築城 3

地元の方と、日吉に移転してきて築城をかいま見た軍関係者の方に伺います。

ききて・寺田貞治

★Y氏・日吉

戦争中、土建業をしていたので、軍から頼まれて地下壕を掘る人夫を三〇人ほど世話をした。いい手間賃になるといので東北地方から働きに來ていた。夜は人夫の寝泊りなどの世話をした。人夫の分として米が來ていたので、飯は十分に食べさせた。人夫が働いている現場には行ったことはないが、現慶友病院の方から慶応の校舎の方に掘って

いたと聞いた。

★A1氏・宮前

地下壕建設の作業は、一五〇一六才の少年兵や朝鮮人がやっていた。父の話だと朝鮮人が殆どだったという。主にツルハシで掘り、土はトロツコで外に運び出していた。ダイナマイトも使っており、時々ハッパの音がした。現在住

んでいる家は、運び出した土の上に建てられており、以前より四〇五m高くなっている。

兵隊や土方や朝鮮人が、お腹を空かして來るので、よく大豆を炒ってあげた。見つかると思われ怒られた。近所の農家では兵隊さんの親子を内密に会わせたりしていた。

★K1氏・箕輪

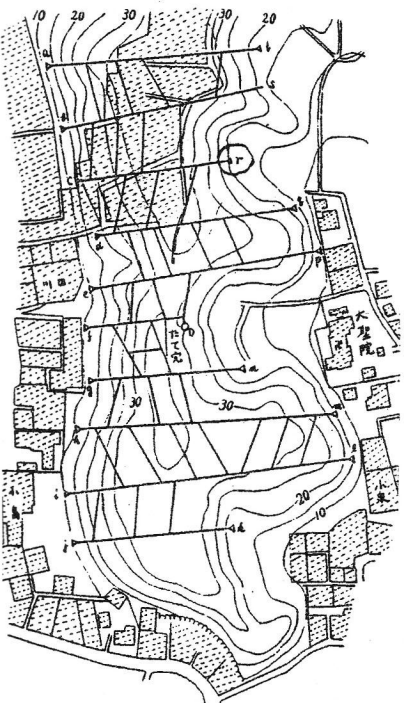
地下壕を掘り始めたのは昭和一九年中頃であった。掘っていた兵隊は、北海道から來た人が多かった。桃や葡萄など果物を作っていたので、兵隊がよく果物をもらいに來た。朝鮮人は見かけなかった。

し、噂に聞いたこともない。

掘り出した土は壕の出入口の下の低地（慶大寄宿舍の北側の低地）に捨てていた。

★K2氏・箕輪

地下壕は現在の小島宅の裏に出入口が三つある。rの出入口のところにかまぼこ兵舎があり、兵士が寝泊りしていた。地下壕の北側二本は出入口から西に向って急な坂になっている。すべての地下壕は西の方に少し下がっており、掘った土砂は西側に運ばれた。小島宅裏から地下壕に入り西の出入口から出るとちょうど



川田宅がある。

★M氏・日吉本町

昭和二〇年五月に戦車を狙う速射砲の兵隊として召集された。本土決戦にそなえて大磯の高取山で穴を掘って陣地を作っていた。外泊で日吉には時々来ており、地下壕を掘った土を運ぶトラックが行ったり来たりしているのを見た。

★A2氏・宮前

召集される前から海軍が来て地下壕を掘っていたのは知っていたが、海軍のどこの部隊が来ていたのかは分らなかった。穴を掘っていた人が死んだという噂を聞いたことがある。朝鮮人のことは分らない。

★久保寺重夫氏・日吉本町、

元東京警備隊第七分隊

地下壕を掘っていた朝鮮人

労働者が、烹炊所によく残飯をもらいに来た。彼らはボロボロでつぎはぎだらけの服を着て、昼夜兼行の三交代制で働いていた。飯は一日二食で、相当ひどいものを食べさせていたようだ。烹炊所で残飯に塩をかけておにぎりを作って食べ、友人の分も作って持って行った。

★野口昭二氏・元連合艦隊司令部暗号科

地下壕は二等兵曹が一個部隊を連れて掘っていた。作業班には二、三人の兵隊がいて

あとは朝鮮人であった。この部隊は新丸子にいたようだ。地下壕⑭から南東にのびる出入口を朝鮮人が掘っているのを見かけた。朝鮮人は多かったように思う。

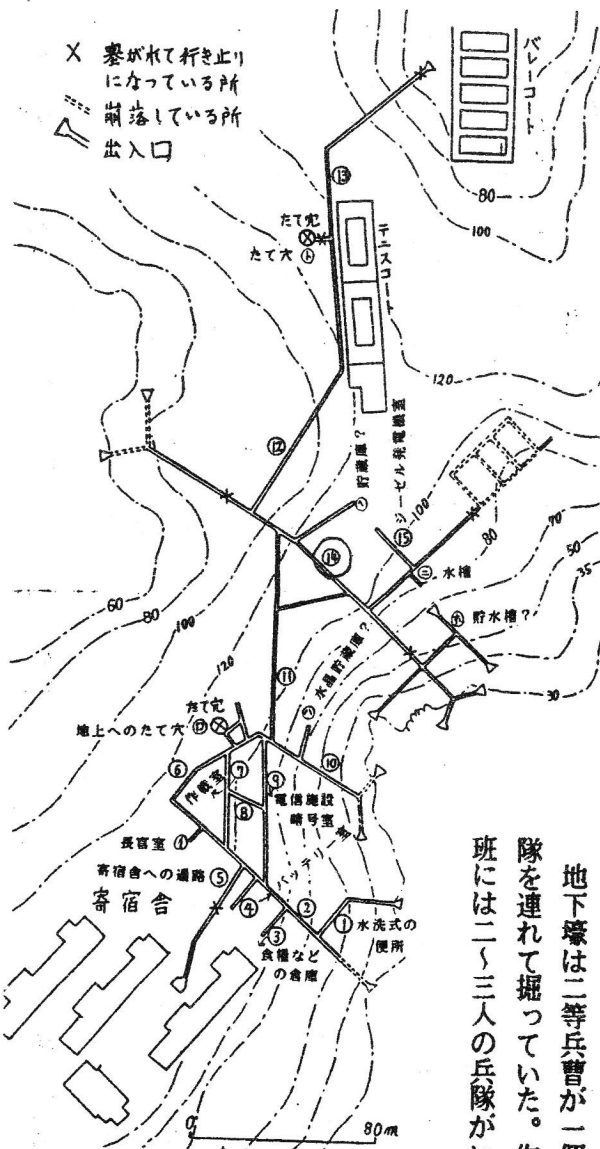
★若林繁雄氏・元海軍人事局主計兵曹長

地下壕を掘っている現場を見たことはないが、作業服を着た人は見た。朝鮮人がラバウルなどにも行かされて穴を掘らされていたことは聞いていた。

★石原 光氏・元海軍省艦政本部・中尉

現慶大記念館裏の地下壕を掘っているのをみたが、出入口から土砂が丸見えになっていた。あれではやられると思った。

(生協ニュース教職員版第四七、四九、五二号より抜粋転載)



(1)

(2)

ご意見、ご感想をお寄せ  
ください。お待ちしております  
ます